

# 巻頭言

2008.5月号  
茗溪塾

茗溪塾教務部 03-3659-8638

## 目的を持って始める

茗溪塾塾長 宇野雅春

5月の声を待たずに「合格体験記」が完成しました。すでに配布が終わっていますので、目を通された人も多いと思います。注意して読んでみると受験の「成功」「不成功」の法則が見えてきます。「分かりきったこと」を受験の「当事者」はなかなか受け入れきれない状況がそこにはあります。生活していくということや、自活していくことの厳しさが、今の日本の生活の中から想像しにくいからかもしれません。大人も子供も、些細なことで傷つき、些細なことでいがみ合い、行動の過ちを全て人格否定につなげながら、自分の住みよい世界が最も正しい世界と錯覚して、目的を見失っているようにも見えます。はっきり言えることは、人生は遊びの場ではないということ。そこはジャングルのようにたくさんの危険があり、生き延びていくための方法を必要とします。「受験」が子供達にとっては最初の関門になります。そのためだと思っております、受験を通して学んだことが「合格体験記」の中には、たくさんあふれています。

中学受験の作文の中に、『僕は4年生の夏休みに塾に通い始めました。その理由は「中学受験をし、合格する」という簡単そうな目標を達成するためです』という出だしで始まる文章があります。この簡単そうに見えた目標が思ったよりも高いと気づいたとき(6年秋) それまでつづけていたサッカーをやめ、受験勉強を優先させます。その甲斐あって成績はぐんぐん上がっていきます。小学生にとって、自分の目標を現実的に理解するというのは、年齢的に考えてかなり困難なことだと思えます。ほとんどは、受験直前に、「もし不合格になったら?」と、不安になる中でやっと、何のために勉強してきたのかに気が付きます。私が、経験上で驚いたことは、受験勉強で追われている受験生が必ずしも、目標をしっかり認識していないということです。私の長男が、受験が終わってから、「何で、もっと早く教えてくれなかったのか!」と不満を漏らしたことがありました。つまり、受験の厳しさや競争のレベルの高さなど、教えてもらっていなかったというのが、長男の不満でした。あれほど、いろんな場面で話したつもりだったのに、子供の中で認識が深まるというのはかなり難しいことだと分かりました。

高校受験でも、この目標認識がなかなか持ちきれないで受験に失敗することが多くあります。合格体験記にこんな文があります。『正直、夏期講習でも合宿でも受験モードに入れなかった。部活が終わって、大事な時期に怠けてしまった。それからずっと本気になれず、とうとう冬がきてしまった』この生徒は、担当のクラスリーダーに「高校はどうか?」といわれ、初めて目標がみえ俄然やる気を出していきます。でも、もっと早く目標が決まっていたら、結果は違っていたはずですが。今の公立中学生のほとんどはこんな感じで受験をやり過ごしているように思えます。

大学受験ならばなおさらです。自分の将来と直結する受験だけに「目標」は更に重要です。全国規模の浪人まで含めた競い合いと考えると、早い準備が必修になります。

自分では気づいていないかもしれないのですが、目的を持って始めるということは、誰もがしていることです。料理を作るのにレシピを見るとか、ジグソーパズルを完成するには完成図が必要です。家を建てるには設計図が必要です。論文を書くには大筋の流れを決めなくてはなりません。どこに行きたいかを決め、そこに行くまでの地図を書けるようにすることが「意識」です。この間行事の度に生徒に聞いているのが、「人生を成功させたいのか?それともそんなことはどうでもいいのか?」という質問です。全員が成功させたいという方に手を挙げます。

そのために必要なこととして「目的を持って始める」はあると思います。多分、漠然とでも良いので、自分の進みたい方向を想像すること。そしてそこに向けての最初の「目的」(受験校)を決めます。後はそこに至る「地図」を自分で作っていけばよいのです。

5月、少しずつ忙しさが増してきます。疲れとストレスで「反動的」な人がふえてきます。感情に流されてしまえば自分を見失うことになります。どんなに小さな一歩でも良いのです。自分の目標をしっかり確認して進むことが重要だと思えます。